

二つのガマ

よみたんそん
 読谷村の戦争遺跡から

戦争遺跡の研修で、沖縄県読谷村を訪ねる機会がありました。読谷村は沖縄戦でアメリカ軍が上陸した地点です。

案内してくださった読谷村職員の方の第一声は、「読谷村は平成18年から戦後」という言葉でした。読谷村では、アメリカ軍の軍用地や施

設が返還された平成18年から本当の戦後が始まったのだと説明されたのです。

今回はこの読谷村の戦争遺跡から、住民が避難した2つのガマ、「シムクガマ」と「チビチリガマ」のことを紹介します。ガマとは、沖縄や鹿児島の方言で洞窟のことです。

シムクガマ

シムクガマは波平又川原に洞口を開いた天然の鍾乳洞です。

1945年(昭和20)3月、アメリカ軍の空襲や艦砲射撃が激しくなる中、波平では約1千人の住民がこの洞窟に避難するようになります。

4月1日、アメリカ軍の沖縄本島上陸の日に、読谷村の西海岸から戦車をともなった一部が、シムクガマに迫ってきました。避難していた人々は恐怖の余りうろたえ、洞窟内は大混乱に陥りました。

その時、ハワイからの帰国者、比嘉平治(当時72歳)と比嘉平三(当



▲シムクガマ



▲チビチリガマ

時62歳)の二人が、「アメリカ人は人を殺さないよ。」と、騒ぐ避難者たちをなだめ、説得し、ついに投降へと導き、1千人前後の避難民の命が助かったということでした。

チビチリガマ

チビチリガマは、シムクガマから北西に1キロほど離れたところにあります。

この洞窟は、アメリカ軍の沖縄本島上陸の翌日1945年(昭和20)4月2日、鬼畜と教えられたアメリカ兵の残虐な仕打ちを恐れて、肉親が相互に殺しあうという凄惨な「集団自決(集団強制死)」が行われた所です。

証言によりますと、「アメリカ軍上陸直後に、壕の中から男女3人が竹やりを持って出て行き、男2人が壕の前でバタツと倒れた。すると壕内の住民は絶望感でパニックに陥り、集団自決が始まる」とあります。また、別の証言によると、「火を燃やして窒息死を図ったり、毒薬注射をして死にいたらしめ、注射液が尽きると、鎌や包丁などの刃物で肉親相互が殺し合うという惨劇が繰り広げられた」ということです。

このようにして、この洞窟の避難者およそ140人の内、83人が非業の最期を遂げられたということですが。この中には、2歳、3歳の幼児も含まれています。

「シムクガマ」と「チビチリガマ」なぜ、このような違いがおきたのでしょうか。

平和な時代でなければ、戦争の真実について語れません。読者ひとり一人が、しっかり考えていただきたいと思えます。

(参考:「読谷村の戦跡めぐり」読谷村史編集室)